

巻頭言

この4月から、東北大学の惑星プラズマ・大気研究センター長を併任しています。

学部生時には「放置度」世界トップ(過去形?)の京大・物理で見事に放置され、「平日2-3コマ目だけはバイクを飛ばして北白川、残りは瀬田川」という生活でした。艇と衝突せずに済む研究室はどこや?を探った結果、暇そうで何故か人気無さそうであった「宇宙線研究室」への潜り込みに成功。入ってみると、「宇宙線」ではなく「赤外線(あかりに連なる)とダスト(はやぶさに連なる)」の研究室で驚きましたが、これが惑星科学会との事始めになりました。

研究室でフロッピー付PC98に初接触して喜んでいた背後では、「重点領域・原始太陽系と惑星の起源」(1987-1989)が走っておりました。これが惑星科学会発足(1992)準備の一部ともなったようです。その主役級には研究室の主・長谷川博一先生、宇宙研の水谷仁先生、東北大学の大家寛先生、というその後お世話になった皆様がおられました。とはいえ、「旧首都」の大学で暮らす物知らずの学生は、そんなもの全く知らない。インカレ敗北の次週に受けた院試では「宇宙研、知ってる?」と聞かれ「は?」と答えたような状態。日本の惑星探査機などまったくの想定外(「惑星? 米ソの話やろ」)。知らんものに自分の未来像を重ねるわけがなかったのですが、結果的に松本紘先生にしばかれつつ工学研究科を経由し、火星探査機のぞみとその失敗に巻き込まれて、人生は捻じ曲がります。

丸30年がたち、複数の衛星・探査機群(例:10月には漸くBepi君打上)に携わるだけでなく、教科書まで書くに至りました(共立:大竹・佐々木・土山・笠羽。この7月、ついに脱稿!)。当時の私の「想定外」は、今ではそこらの子供にも「現実世界の話」です。問題の種は尽きませんが、これも「現実たればこそ」。宇宙と惑星に絡む活動は、真に人類の連携と未来に連なっています。「東北大はえらいのう(当時の京大比)」と日々感心しつつ、昨年亡くなった家内の父君(医学部の先生でした)の言葉「君の仕事は文明のためやろ」を励みに、皆様と共に歩む所存です。

笠羽 康正(東北大学惑星プラズマ・大気研究センター(PPARC))